女はどこにいるか——フェミニズムことはじめ

江原由美子

1　女性問題なんて、くだらない？

■「フェミニズム廃れ」？

実は私は、最初にフェミニズムが流行ってないという「フェミニズム廃れ」を話題にしようと思っていたんです。でもこのようにたくさんの人が集まって来て下さったので、「フェミニズム廃れ」と言うことが、大変難しくなりまして、困っています。（笑）跡見は違うのかな？　でもまあ、気をとりなおして話しましょう。「女はどこにいるか」というテーマですが、最初に、「フェミニズム廃れ」という話題。どうも最近フェミニズムとか女性問題というのが、あまりウケがよくないらしい。あちこちでそういうことを聞きます。

たとえばですね、ここと同じく女子大の先生の談ですが、非常勤の先生を呼んで、とても魅力的な女性問題のテーマを取りあげた講義を開いた。ところが来た人がなんと三人。女子大で女性関連の授業をつくっているけど、どうも学生へのウケがよくない。

先日早稲田で講演会があったんですが、そこでもそんな話が出ました。フェミニズムへの女性からの反発がすごくあるというのです。一つの例を紹介してくれたんですけど、「今女性が騒ぎすぎている。そもそも男と女は違うんだ」という発言。その意見は、そのあとに「女は男に従うべきだ。女性は男性の意見に従うようにできているのに、今の女は騒ぎすぎている。そんなことはどうでもいいじゃないか。フェミニズムは、わがままな女性がいばりくさってい

るようで嫌だ」――と続くんですね。私はそれが、「女は男に従うものだ」という前提がなければね、それはそれでいいと思うんですよ。でもその発言は「私は男に従う」という意見ではなくて、「女はみんな男に従うべきだ」という主張なんですね。なぜ「自分は」と言えないのか。私、それには怒りを覚えましてね。そういう意味で、その意見はおかしいとは思ったんですが、そういった実例に限らず、女性からのフェミニズムへの反発はすごく強いということが言えそうです。

■反発を強める若い男性たち

それからですね、今若い男の子たちがすごくフェミニズムに反発しています。先日、ある場所で容貌差別についてのシンポジウムをしたんですが、そのシンポジウムの後に質問に立った人が全部男性で――淋しかったですね、女性は一人もいませんでした。会場となった学校自体は六割が女性なんですよ。その男の子たちの意見はみんな同じで「フェミニズム、フェミニズムと騒いでいるけど、僕たちはそういうのはおかしいと思う」と口をそろえてる。「何か最近は女の子にいじめられているような気がする。三高の男性が良いだとか、それでいて日常生活では重い物は男が持てと言う。フェミニストたちは女性が差別されていると言っているけど、僕たちの方がよっぽど可哀想だ」と。

そういう意味でも、男性たちの反発が強まっています。今挙げたようなことを考えてみると、一見フェミニズムはもてはやされているようですが、大変難しい時期にきていると思います。いろいろな反感も強まっていますし、強い疑念がむけられる傾向にあります。この大学ではこんなにたくさんの人が来て下さったので、そうでもないのかもしれませんが……。

どうして特に若い女性がフェミニズムに共感することが少ないのか、若い男性が反発するのかというのは、もっと考えをつめていっていい問題ですよね。特に女性に関連していえば、もうフェミニズムなんていらないというムードはなぜ生じてきたのか。もう十分満足しているからだろうか。どうもそうじゃないんじゃないかという気もするんですが……。もしかしたら若い男性の反発が強まっているから、フェミニズムに共感する女性を演じるのが難しくなっているのかな、という風にも思うんですが、まだ私にもわからないといったところです。

フェミニズムがこういう状況にある今、それが何を問題にしてきたかという点をもう一度確認していく作業が必要だと思うんです。フェミニズムというのは、「面白おかしい話題を取りあげて、男と女がケンカすることだ」とかですね。あるいは「男×女〇の思想だ」と受けとめている人がいると思います。私はそうではないと思っているんです

が、うまく言えないから誤解が増えている部分があると思うんで、もう一回女性の社会問題を産出してきた構造みたいなものをふり返って、確認しておく作業をしなくてはいけないのではないだろうか。その中で解決されつつある問題は何であり、これから解決しなくてはいけない問題は何であり、どうしてそれが問題なのかということを把握した上で、フェミニズムがいるとか、いらないんだという判断を下すべきなのではないでしょうか。

ですから今日のお話のメインタイトルの「女はどこにいるのか」というのは、ここまでは、フェミニズムはどこにいるのかという問題だったわけですが、これをおさえることは「今社会のなかで女性はどこにいるのか」を考えることでなければいけないと思うんです。その意味で、フェミニズムを再考するためにも、「女性はどこにいるのか」という本題に入りたいと思います。

2　女性問題の社会構造

■ライフサイクル

では、女性の社会問題を産出した社会構造についてお話しようと思います。女性の社会問題を考えるのに、封建制とか、父権制社会成立以来といった論じ方をしてもあまり意味がないので、現代日本社会の問題として限定してお話させて頂きます。その時、いちばん基本となるのは、女性

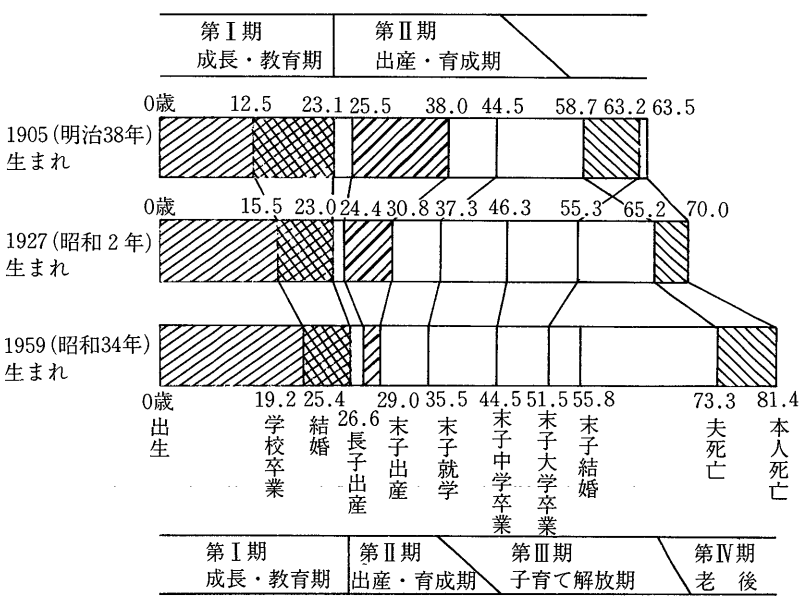

図2－1　女性のライフサイクルのモデル

のライフ・サイクルに関することと、日本の女性の労働の変化ということの二つですね。ライフ・サイクル上の変化と、女子労働者の変化、この二つが女性の社会問題というのを問題として――大量の人たちの問題として浮上させてきた構造変動だと思っています。

ここで**図2―1**を見て下さい。これは、もっとも基本的な図です。この図の意味は、つまり、どういう時代に生まれたかによって、全く「女の一生」というやつが違ってくるということなんですね。何が違ってくるかというと、まず子供の数が違う。かつてはですね、出産の回数が非常に多くて、子供の生存率が低いという時期が続いていたんです。ところが一応近代以後になりますと、産んだ子どものその多くが育ってしまう状態になりました。そうすると、子どもを産む数が減ってきます。明治三八年生まれの人を例にとりますと、この人は一二歳で学校を卒業しまして、結婚するのが二三歳、これは今とほとんど変わりませんね。そして長子を出産するのが二五歳で、末子を出産するのが三八歳。出産期間が一三年。つまりその間にたて続けに子供を産んでいたんですね。そうしますとその子供が育ちあがるというのがかなり後のことでありまして、ライフ・サイクルのモデルでは、明治生まれの女性は、末子の結婚を見ないで死んだことになります。だから、「女の一生」というのは妻役割と母役割でおしまい――これがその時代の実態だったんです。ところがですね、昭和二年生まれぐらいになりますと、もう全然違います。子供の数がほぼ半減しますので、子供の数が二人ないし三人になってきますと、出産にかかる年数が減りまして、したがって子育て終了の時期がすごく早くくる。そしてもう一つの大きな変化要因があるんです。平均寿命が延びた。この二つの要因が作用して、大変な事態が起きたんですね。これが日本でフェミニズムが台頭してきた、もっとも大きな理由です。つまり子育てが終了した後の人生が非常に長くなってきた、ということなのです。

みなさんよく、「女の一生は家事、育児。子育てがいちばん大事」といいますね。――いいですよそれは。でも、現代ではそういう人たちも、だいたい平均四二～三歳になると、役割喪失してきます。子供は学校に行って、夫は会社に行って昼間家にいない。夕飯も子供たちはバイトで食べてくるとか、夫は宴会がある。お母さんは一人ぼっちなんです。それで彼女は、八〇歳まで生きるんですね。人生の半分がまだ残されているんだよね。まず、女性の一生は家事、育児とはいえなくなってきているという現実を背景に、フェミニズムが台頭してきたという点を頭に入れておいてください。

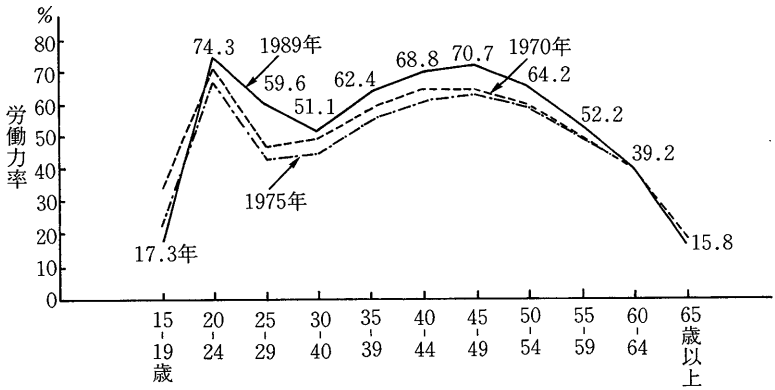

図 37－1　女子の年齢階級別労働力率の推移

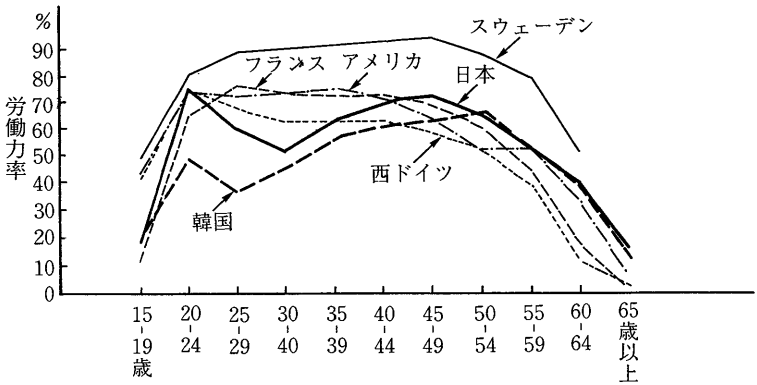

図 37－2　女子の年齢階級別労働力率（国際比率，1986 年）

■女子労働の変化

もう一つが、労働。図37―1は、女性学をやっていれば必ず出てきます。一番この表で重要なのは、一九七五年が日本の女性労働力率の底であるということ。これは何度強調してもしすぎることはないほど大事なことなんです。昭和五〇年に日本は、専業主婦がもっとも増大した時期を迎えたんですよね。五〇年以前じゃないんですよ。

みなさんの中に、こういうイメージを持っている人がいたら気をつけて下さい。「女は昔から家事、育児をしてきた。昔ながらの役割が家事と育児。それなのになぜ今になって女性は働き始めたのでしょう？」――これは大ウソ。全然事実とは反します。女性の労働力率は、つい一〇数年前が最低であって、それ以前の女性は今より働いていました。で、現在も一九七五年段階よりも働くようになってきました。けれど、一九六〇年頃はですね、多くは第一次産業従事者で、つまり農家や商店のおかみさんとして労働に参加していたのですが、一九七五年以後の女性労働力率の増加というのは、一貫して雇用労働者の部分で少し意味が違うんです。女性が専業主婦になってくるというのは、日本では戦後の話なんですよ。イギリスでも第一次大戦前後、今世紀の話なんです。それが、この数十年だけで変わってきたんです。グラフを見ると、一九七五年と八九年との違いはとても大きいと思います。つまりこれが今起きていることなんです。女性は、各年齢層とも雇用労働者としての労働力となりはじめたということです。

図37―2を見ると、日本が「M字型」になっているというのがよく分かるんですね。日本とだいぶ違う国がある。この一番底の部分はどういうことかというと、日本の場合、女性たちは、いったん退職するんですね。結婚して、家事、育児、特に育児のために退職する割合が非常に高く、そして再就職というかたちをとっているのですが、実はこの働き方がさまざまな問題を生みだしているのであります。

基本データとしまして、女性のライフ・サイクルがこんなに変わったということ、そしてもう一つ、女性が各年齢層とも働き始めているということをおさえておいて下さい。

3　何が問題なのか？

■働き過ぎと介護、育児疲れ――性別分業夫婦の病理

それでは、どうしてそれが問題なのかということを少し見ておきたいと思います。NHKの「国民生活時間調査」（一九八五年）に基づいて、夫婦の家事時間を算定しました。そうしますと共働きの場合、夫の方は家事時間が平均二二分。妻の方は平均四時間一九分です。それで、非共働きの方は夫の方が平均二八分。妻は方は七時間二二分です。この数字から分かるように、夫たちは共働きであるなしにかかわらず、家事に割く時間がほぼ同じ。そういう状況の

中で女性は働いているんですね。これは平日の家事時間ですから、共働きの妻の休日の家事時間はもっと増えるはず。年間にしてみるとだいたい一六〇〇時間ぐらいになると思うんです。男性の方は、せいぜい一〇〇時間ぐらい。ここで家事に費やす時間の差が一五〇〇時間あるんです。いま、政府が、労働時間短縮って大騒ぎしているでしょう。あれは日本がほぼ二一〇〇時間なんですね、それで西ドイツが一六〇〇時間ぐらいなんです。年間五〇〇時間も差がある大変だ、先進国の水準に近づけなくてはと騒いでいるんですよ。だとすれば女の方が、一五〇〇時間も多く家事労働していることが、どれほど大きな格差かわかると思います。この共働きの女性たちはですね、家事以外に雇用労働も行っているんです。かりに、フルタイムで働いたとします。そうすると二一〇〇＋一六〇〇で、その女性はだいたい平均三七〇〇時間働いているんですよ。これがすごい問題でなくしていったい何でしょうか。

それでですね、「働きたい女性は働けばいい。働きたくない女性は働かなくていい」と一見通りのいい話をみなさんしますし、私もその通りだと思うんですが、家事労働時間を誰がどのように分担するのかという議論ぬきに、「女性が家事をするのはあたりまえ」のままで、「女性よどうぞ働きなさい」と言われても、働けるわけないですよ、現実に。これがやはり最大の問題なんです。それなら働くことはないじゃない、と思う人もいるかもしれません。実際、共働きでない妻の家事時間が平均で七時間二二分ですから、他の仕事を全くしないで、これで男性とトントンということであれば、その方がいいという人がいても当然のことなんです。でも、これが問題でないわけではない。後で、これがどうして問題かということを述べたいと思います。フルタイムで働く女性は男性の協力なしに働くと、三七〇〇時間も働くことになるんです。このようなことができる人はスーパーウーマンしかいませんから、そういう人はほとんどいない。だから仕事の世界では、非常に多くの男女格差が生じてくるのです。データでみると、毎年ものすごい勢いでパートタイム労働が増えています。つまり、家庭の中で家事、育児を受け持ちながら、それに合わせて働く女性が増えている。そういうかたちで女性は働いているわけです。それが労働力率の増大に結びついている。

まず、フェミニズムが主張しているは、このような労働時間の不均等なあり方、特に家事労働時間の性別による著しい偏り——日本は世界でいちばん家事の負担が女に偏っている国なんですよ。そのことを頭に入れておいて下さい。日本では、ありとあらゆる家事について、それをするのは「女」（妻）という解答が九〇％以上なんです。こんな性役割、つまり家事は女の仕事という通念が徹底している国はないですよ。この極端な偏りをそのままにしておいて、女

性が働くということは、ものすごい過重労働になる。では働かなければいい、それはそうなんですが、働かなくてすむような人もいるけれど、女が働かなくてはならないような給料しかもらえないような男性もいる。そっちの方が現実としては多いですよ。今女性が共働きをする二大理由――(1)子供の教育費、(2)夫の給料が少ない。(悲しいわね。)実際、家庭というのは女性に頼っている部分がかなりある、働かざるをえないから働かなくちゃいけない部分があるんです。

■職場の性差別／企業太りと生活貧乏

ところが働くときに、ちゃんと働くとものすごい負担になってしまいますので、パートタイムを選ぶ。そうすると一般のフルタイムの労働よりずっと損なんです。ものすごく賃金が低い。平均的に、高卒直後の時間給に、パートタイムの人の給料は合せられているそうです。三〇代、四〇代になっても昇給なし、男性の年功序列型賃金体系と全く違います。だから、女性の平均賃金というのは男性の半分以下ですよ。若い時、新卒、大卒の時だけ九〇%くらい。あと男女の賃金格差は広がる一方。

パートタイムを選んだ場合、労働時間では自分の望む通りになったとしても、今度は職場における待遇でものすごい不利を被ることになる。フルタイムを選べば疲れすぎて死んでしまう、パートタイムなら損をする。働きたくないのに働かなくてはならない人たちにとっては、どちらを選んでも大変だ。そこでどこかおかしいんじゃないかと言い始めた人が数多く現れてきました。パートと本採用のどちらを選んだとしても、矛盾が残るような女性の働き方というのが現在の女性にのしかかっている、これで本当にいいのだろうか。そこに問題があります。それでは、最近増えてきましたけど、「私は家事を一切しません、男性と同じように働きます」と言える女性、またそうしている人たちはうまくいっているか。というと、それもうまくいかないようにできているんです。企業における女性というのは、たとえ独身の女性でも、女性というだけで非常に難しい位置におかれています。一般職と総合職というのがありますね。女性が総合職を希望すると、「大変だよ、転勤は覚悟だね」とか、「結婚ができないよ」とかおどかされる。男性が、一般職を希望するともっといじめられるんですよ。「男のくせに、根性のない奴だ」とか言われるんです。それも大変な差別だと思いますけど、それだけじゃない。たとえ女性が総合職に就いたとしてもこの総合職自体がひどいんです。

私の友人の新聞記者が「総合職女性の悲哀」という記事を書いていまして、彼女はいろいろ総合職の女性から取材したのですが、企業の女性総合職の扱い方は二種類あると

いうんですね。一つは男性と全く同じに扱うというやり方です。それは職場においてなら、望むところだという人もいると思いますが、その女性たちが一番悩んでいるところは、つき合いの酒の席などもすべて男性と同じに出ろといわれることなんです。それも何するかというと、女性だからといってお酌させられたり、サービスをさせられる、ふんぞり返って楽しんでいると怒られるんですね。確かに職場で男性並みというのはいいですが、日本の職場は特に総合職は外部との交渉、接待といった対人関係が多い。対人関係の中心はやはり、女性と男性の従来の役割分業みたいなものが当然のように前提とされますので、そうした席では女性としてのサービスが要求されてくるのです。そういうことに彼女たちは不満を持っている。また、そうして男並みに働くことによって、結婚・出産ということが難かしくなってくる、といった悩みが生じます。

もう一つは、総合職という名前だけで、実際何をさせていいのかわからないという会社が多いんですね。やっていることは一般職の女性と全く同じ。これではいやになってしまうという女性がいます。以上の二種類ありますが、いずれにせよ総合職の女性がうまくいっているかというとそうはいえない部分があります。女性であるだけで、たとえ総合職であったとしても、仕事の上でさまざまな性差別が存在しています。それは本人が家事労働時間を背負ってなくてもそうなんです。だからこそ、セクシャル・ハラスメントや、昇進差別、賃金差別といったことが問題になってくるわけ。

じゃ一般職を選べばいいかというと、一般職が最近ひどくなってきていまして、私の友人は、まだ総合職の方がましだと話してくれました。一般職だから給料は上げないまま、「女性にやる気をつけよう」とか、「女戦力を活用しよう」という経営戦略に基づいて、事実上の仕事は総合職並みというのが増えてきているそうです。これは企業の話ですが、家事労働を担ってなくても、性差別があるという問題を一つおさえておいて下さい。

■夫婦間のディス・コミュニケーション

もう一つはですね、女性が家庭の中で、自分が選んで家事をやるんだから、そのことに不満はないと思っている女性たちの中にも、問題はかなりあります。それは家庭内での対等性ということに関連して、特に専業主婦たちが、男性たちの態度――つまり家庭内でのあり方みたいなものに対して非常に深刻な問題を提起しています。

たとえばですね、性別役割分業、つまり「男は仕事／女は家庭」という話なんですが、これを守っている夫婦というのは圧倒的に多数なんですれど、かりに「男は仕事／女は家庭」という立場をとるにしても、あまり気づかれない

ことなんですが、どうもその主張には二種類の考え方があるようなんです。これが、男性と女性とでは非常に大きく食い違っているらしいと私は考えています。一つは、「外の仕事は本来男の役割、家事は本来女性の役割」というものです。こちらは、女が仕事を持つ持たないに関わらず、男は家事をしなくてもいいという発想なんですね。家事は女の役割で、男っていうものはそもそもそういうことはしない。女という性別に、家事とか育児が貼りついているわけですね。もう一つは、「男性が外の仕事をしている、だから私が家事を受け持つ」という考え方で、女性に強いのはこっちなんです。こっちの考えでは、外の仕事と家事という役割分担は性別に必然的に伴っているわけではなく、たまたま今そうだからということで分業するわけです。この二つが両方区別されないまま、性別役割分業意識ということに括られていますので、ここでですね、「男（だけ）が仕事をしている」状況が変化しますと、（変わり方は二つあって、一つは女も仕事をし始める、もう一つは男も仕事を辞める）すると夫婦の間が非常にギクシャクしてくるんです。「今まで、私が家事をやってきたのは、夫が仕事をしてくれるから当然と思っていた。でも私も同じように仕事を始めたら、当然平等に夫も家事、育児をすべきだ」、と後者の分業観をとっている女性は考えます。もしそう言ったとき、その人の夫が前者の分業観の持ち主だった場合、これはものすごい意見対立の種になるんですよ。また夫が退職したときに、トラブルが発生します。夫が退職するまでずっと一貫して性別役割分業夫婦でやってきた。ところがですね、夫が退職した以上、奥さんの方は夫が家にいるのだから半分は家事をやってほしい、と言いたいところがあるわけですよ。でも夫は今まで働いてきたのだからといって、今度は家でふんぞり返って寝ている。中年夫婦の危機というのは、この意識の違いがすごく大きい要因なんです。

実際、男だけが仕事をしているという状況が壊れてみないと、自分がいかなる意味で性別役割分業を受け入れていたのかわからないんですね。このあたりに、すごく矛盾を抱えているにもかかわらず、各自の分業観に関わるコミュニケーションができないんです。こういうことを話し合う夫婦は非常に少ない。なぜかというと夫婦間のコミュニケーションのあり方が対等ではない。よく専業主婦で皆さんのお母さんぐらいの年齢の方たちが言うことなんですが、夫とは話ができない、何を言っても無関心な様子ですとかね、殺してやりたいとまで言い出す方もいます。まともに話ができないということで悩んでいる。そうしますと、現在の問題というのは、家庭内で分業するならいかなる意味で分業すべきかとか、どういうかたちで働くべきかといったことが問われないままにきている。それが今、中年夫婦

がかかえる危機的な要因の一つになっています。

4　性別と世代を越えて

■ライフ・スタイルの自己決定権の喪失

でも、職場での平等だとか、夫婦間の対等性が、かりにあったとしても、職場の労働時間が現在のままでは、それぞれの男女は自分のライフ・スタイルにあわせた生活を基本的にはおくれません。今のままの労働時間の体制とか社会福祉のあり方を続けていると、どういうかたちをとっても合わなくなってしまう人がたくさんでてしまうんです。

一番の問題は、育児とか老人介護等についてです。この件に関しては、女性の労働力というのがまさにあてにされている、といった社会体制がある。今の中高年女性が一番おそれていること、困っていることは、老人介護が結局女性の肩にのしかかっていること。四〇代ぐらいになってかなり育児が楽になった女性たちが、いつまた老人介護に全面的に時間を取られるかわからない。そうしたら自由がなくなると怖がっている。実際老人介護をしている人の生活を聞いてみますと、満足に寝る時間も持てない。そういうような生活がですね、女性であり、嫁であるということだけで、多くの場合自分の意志とは関係なくあてがわれてしまう。今福祉は充実してきていますが、まだまだ不十分で、特に日本の福祉行政では、「家族は含み資産だ」というふうに位置づけているんだそうですよ。つまり、女性の労働力は、タダで利用できるからわざわざ福祉制度を充実させなくてもすむ、ということです。老人介護をやっている人は、当然働けませんからお金もありませんし、年金も少ない、だから自分の老後も不安定になる等々の非常に多くの難問をかかえているんです。

こうした問題っていうのは、すごく構造的な性格をもっていて、決して今ちょっと女性フェミニストたちが騒いでいるとか、男性をおちょくっているなどといった、みかけの問題だけで「女性問題なんか下らない」と却下してしまえることではありません。社会を変えない限りだめなんです。フェミニズムはそのへんをちゃんとやりたい、やっているわけです。でもいろいろな議論の中で出てくるのは、「女は強くなった。そんなにいばるのはよくない」みたいな反発。それが主流になって「フェミニズムなんて下らない」という方向に傾いているように（特に男性たちと話していると）私は強く感じます。

これからやっていかなくてはいけないのは、家事の分担や性別役割分業を前提とした労働時間のあり方といった基本的なことを社会の中で少しづつ変えていくこと。これがなぜ必要かというと、ライフ・スタイルはあくまで個人が決定するものだからです。男であるか、女であるかということに関わらず、自分が決めるものなのです。でも今、そ

れができない。性別というものの方が、よっぽど個人のライフ・スタイルを決める上では大きな要因になってしまっているんです。たとえ、今の女性のライフ・スタイルを認めている人――専業主婦もいいじゃないと思っている人も、いつ状況が変わるかもわからない。そうであれば、そんな人とも一緒に考えていける問題だと私は思うんです。自分が思った通りの人生を生きられる、未婚・既婚・シングル派のいかんを問わず、このような状況をつくること、はやっぱり必要なんです。

今ね、専業主婦がいて、夫が働いている夫婦はいますよね。いっぱい。でも、逆にしようと思ったらできませんよ、そんなこと。女性にいい職場がありませんし、男性に家事、育児をさせてほっておいてもらえる社会じゃないんです。世間がうるさくいいますからね。ただ性別役割を反対にしただけなのに……。

そういう世の中、それを変えていかなくてはならない。ライフ・スタイルを自己決定するというのは個人の権利だと思うのですが、その権利意識が弱いことが、性別に関わるこのような差別を平然と許容させているんだと思います。私は、そこが日本におけるフェミニズム運動および女性問題の最大の問題点だと判断しています。その意識の弱さが、女性だ、男性だという性別や、みんながこうやっているという傾向を持ち出すだけで、自分もそのまま大勢に順応してしまう。その状況をなぜ、くやしいと思わないのか――私はそれがくやしくてずっとフェミニズムをやっています。

（えはら　ゆみこ・お茶の水女子大学文教育学部・社会学）

＊一九九一年一〇月三〇日の文化学科主催学会講演会の記録（文責＝編集部）。なお文中の図表は井上輝子・江原由美子編『女性のデータブック』有斐閣、一九九一年から転載いたしました。

江原由美子氏　主要著作

生活世界の社会学（勁草書房）
女性解放という思想（勁草書房）
フェミニズムと権力作用（勁草書房）
ラディカル・フェミニズム再興（勁草書房）
ジェンダーの社会学（共著・新曜社）
フェミニズム論争――70年代から90年代へ（編著・勁草書房）